

何の病年や新らなり食は普通と変らなや熱もなし只た寒さの冬とて大
したことではない風邪を引いた位に思つて居るか二三日内に足腰が立てなくな
つた今うにして思へば発疹チグスではなかつたかと思はれるさうして居る内にソ軍
のシラミ消毒も来て居る人も何んでも丸裸一糸も纏ふことも許されず四〇分ばかり
酷暑の二月十三日骨まで凍る極寒の思ひで消毒を待た
其の為に悪化して遂に帰らぬ人となつてしまつた何んと形容詞したら良いのか
全く片腕を取られた発疹の特利の責任は皆々重くなつたといふに生か抜いて子
供を成長させなくてはと利しの心は鐵より固く此の意を母貫ぬき通すことに
の極に燃えさす夜もいるも病人の唸る声利しも病年となりうた後、毒に故
御の母と父とを夫と子を思ひたり死んで行くといふ救ふ術も無い
部落に盗難の有ると直ぐ内地人に疑をかけ雪の中に出下座をさせ配人の出る
途、筆をせられた犯人の苦は無い、くら落ぶれども日本人だ死んでも盗難なんやある
苦しいものにはこんな目に合せてどうして此の仇と取りに居るものかと折言合つ
た情けない日かつく自然に子供もいやいけて元の調うかささ夫つてしまつた
春も近づき草の芽もボツクで初めのお墓にお参りに行つて驚いた近々長
蛇の如く城や鞍つも列りて居る此の中に恨を呑んで死んだ鬼いや眠つてゐるのと思
口惜しいやつたでせう立すらかつたでせう苦しいやつたでせう鬼をけはなつていふるさうと帰
つて居るでせうと日暮春まで語り合つた
三〇二星余の山金を元木を北背に住復三回してヤツト五月の貨金を貰ふ其の目の
糧を求めて来たその山の頂に登れば遙か彼方に白く霞んで見えるのは日本海唯唯
あの海をみて泣かな者があつたでせう又段々暖になると傳染病や遠近することは明

糧を求めてまゐる山の頂に登れば遙か彼方に白く霞んで見えるのは日本海唯
あの海をみて泣かな者があるでせう又段々暖になると傳染病や遠逝する事は明
らかなもので其の犠牲者は数知れぬ時分にはそれごとく脱走しなくては日本人全
體の生命にかゝるることなので支那長官の許しを受けずには夜明を期
しての知ともなく女を消して三日後には正當五人残つたばかり最收の人々に混つ
て私を親子はまゝ運にも別なで南下出来ぬ結に決つた

忘れることの出来ぬ昭和二十一年五月二十三日愈々出発の白や素を
恨の骨身に沁みたる土地では有りますや永遠に彼地に眠る人のことを想へば断腸の思い
がますます刻々と遠くをやり行く富坂よ涙に霞んで何にも見えなくなると
鉄原まで着きさうとソ軍に見つけられ二再北鮮に返すとのことに泣くにもなげめとは

此のことでせう又逆戻りをする事になり死の標に列車にのり込み梨化といふ驛
で五合向停留場を利用してホールの反対側にとび下り列車をやりすゝし安心と思
ふ間もなく二人のソ軍に見つかり又わけのわからぬ暗い途を犬か猿の標に叩かれ乍ら半

途ばかり歩いて牛の厩の中に監禁されソ軍の例の婦女子を殺せと迫りられ高貴
女の人に頼み我々を救つて頂きたいと感謝して良久やら夜明前に一同又脱走五里は
り歩きたつつけた金化といふ所に着き三十八度線はあと二里だとさういふどんなに力

を付けられたか判りな
夜路を決行して一寸先も見えない道と八度線
と心に念じ友人も子供も

咳ツセリ道は夜は白々と明けやすかたに三度と書つた標が見えまゝと
其の時の多持はここに記あることは不可能なり
人の情によつて親子えここ迄出たり着いたことは生涯高却することはおもふ

不問もなく二人のソノ中に見つかり又わけのわからぬ暗い途を大か藩の旗に叩かれ乍ら半
途はかり歩いて牛小屋の中に監禁され軍の例の婦女子をせせと向せられ商賣
女の人に頼み我々を救つて頂うと感謝して良しやら夜明美に一同又脱走五里は
リ歩きつづけた金化といふ所に着き二十八度線はあと二里だと云いどんなに力
を付けられたか判りない
夜路を決行して一寸先も見えない道と八度線と心念い大人も子供も
唖ッせが道を夜は白々と明けやすかたに三度と書きたる標が見えまうと

其の時の多分持はここに記あることは不可能なり
人の情によつて親子三三三迄出り着いたことは生涯忘却することには出来ぬとい
⁴折言の京城をさして南下し羽生⁵夕方なりい京城の街へ着き暖い夜話合のさ々に
慰まわれこごであつて羊月振りに家の中におむることかできぬのぢな心地かす
滞在二週間で仁川港よりアメリカ貨物船で帰国する事かひきまうと

いづほ降る雨の中を龍山殿より仁川に向ひ愈々船にのり母国と差して嬉し悲しい
悲喜こもくなくお徳のよのせて
やかたドラの音か鳴りひびき今度こつて日本へ帰へれるよるこびにおめて笑顔を見
せるかほとおほ雨に煙つて遠ざかりゆく朝露の少女
二度と来るであらうか朝露の土地よ月夜島も私の視野から離れおめて我に返る
生王受けて三十年片時もはなれなかつた朝露は中はり高れられな土地